
聞き分けのない子猫

月藤 琳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聞き分けのない子猫

【Nコード】

N4436U

【作者名】

月藤 琳

【あらすじ】

異世界トリップ後に年齢逆行！？しかも外見年齢は12才ぐらい。平和に暮らしてたら目を付けられたのは双子の皇太子。しかもこいつら危なすぎですからっ！！！！？

現在、監視の目をくぐって全力で逃げている。
もうこんなところにいてやるもんか、と何度目かになる脱走。

この世界に突然投げ出されたあたしはどうすることも出来ずに呆然としていた。

そんなあたしを拾ってくれたのが孤児院をしていると言う院長だった。

院長の孤児院に引き取られてあたしはいつか独り立ちできるようにと頑張ってきたのに。

「なんでこんなことに・・・」

思い出すだけで泣きそうだ。

20代前半だったのに10代前半の頃まで戻されるし。

どうせ戻ったのは年齢だけで身体的には身長が縮んだぐらいだよ、ええっ！

「今日こそは帰るんだから。あの変態どもの相手なんてもうイヤだ！」

アルバイト先でいつものように働いていたら突然拉致の如く連れてこられたのは宮殿。

そして待っていたのはあの変態たちだった。

父である国王に似て整った顔立ちをしているのにもかかわらず女性にまったく目を向けないと言う噂は聞いていた。

何故自分がここに連れてこられたのかを聞いてすぐ帰るつもりだったのに！

「帰ってどうするの？」

「そんなの決まってるわ。アルバイト先の店長さんに謝って、院長先生に相談して貯めてたお金で国外に出る。」

「それから？」

「あの変態どもの手の届かない場所まで逃げるんだから！」

高らかと宣言したけれどあたしは一人だったはず。
壊れたロボットの如くぎぎぎと首を横に向ける。

「ふん。」

あごに手を当てて思案顔の見目麗しい青年が居た。
普通の人なら顔を赤らめたりするんだろうけどあたしにとったら恐怖の対象だった。

「!？」

ええい、ここはもう逃げるに限ると全力で走り出した。
目指すは業者さんたちが使っている宮殿の外に繋がる扉。
あそこの鍵は内側からだから走れば間に合う気がする。
扉が見えてきてもうちよっと思ったら浮遊感。

「残念。鬼ごっこは終わりだぞ、ルリ。」

「っ　なんでいのよおおおっ!!!!？」

変態どもが仕事で居ない時間を狙ったはずなのになぜここにいる。

「ライオネットが捕まえちゃったんだ、残念。」

「残念とか言いながら余裕で走ってただろ、リオール。」

「まあライオネットがこっちにいると思ったからね。」

通りで全然距離が縮まらないと思った。

さすが双子とでも言うぐらい意思疎通ができているというかなんというか。

「さて戻ろうか、ルリ。」

「脱走する度に連れ戻されるんだからそろそろ諦めろ。」

有無を言わずに部屋へと連れ戻された。

何度説明してもこいつらは絶対に納得しないのだ。

「だから他を当たれって言ってるでしょーがあー！」

「無理だよ。だってもうルリを迎え入れるって発表しちゃったし。」

「俺たちが自ら選んできた皇太子妃に不評を言うやつが居るはずないだろ。」

お前らの顔ならいくらでも寄ってくるだろ。

「それとも僕たちも城下に降りてルリと一緒に暮らそうか。うん、それでもいい気がしてきた。」

「それもそうだな。ルリはここで暮らすのと街で暮らすのどっちがいい。」

皇太子どもが城を出て街で暮らすって言ってますけどー。

「あ、でもルリは国外に出たいんだっけ？」

「国外か・・・さすがに遠いと城に通うまでが大変そうだな。」

「あんたたちがあたしに構いさえしなければそれで物事は解決するのよ！」

顔は良いし地位も良いけどなぜか女に興味がないという噂があった双子の皇太子。

今まで一切貴族の令嬢や侍女とかにも手を出したことはないという。そんなふたりに目をつけられたのがあたしで、最初は物凄く文句も不満も嫌がらせもあった。

「ルリを初めて見たときやっぱり父上の血を継いでるんだって思ったよ。」

「そうだな。母上が父上の元に嫁いできたのは14のときだったからな。」

親子揃ってロリコンだったらしい。

「だからってなんであたしがふたりも相手にしなきゃなんないのよ！」

「抱きたいと思ったのはルリが初めてだ。」

「たぶんこの先ルリにしか欲情しない。」

ふたりは大勢を前に同じような宣言しやがった。

この言葉を受けて家臣の人たちはやっぱり陛下の息子だと思ったらしいと後であたし付きの侍女に聞かされた。

本気で言っているのかと吼えたけど無視された。

「ごめんなさいね、ルリちゃん。ライオネットもリオールも貴方じやなきゃ駄目って言って聞かないのよ。国民も貴方の話を聞いて安心したみたいで応援してくださっているし。」

「母上。」

現れたのは双子の母親にして皇妃であるリリーナ様だった。

リリーナ様は14歳のときに皇帝陛下（そのとき陛下は26歳）の

元に嫁がれてきて16歳で双子を生んだ。

外見から言えば童顔でふたりも子供が居るとは思えないしこれで40代間近とは絶対に思えない。

「すいません、あたし年齢的にどう見てもロリじゃないんですけど。」

「ルリちゃんのことは2年ぐらい前から目をつけてたらしいわよ?」

2年ぐらい前ってあたし14歳じゃん。

外見年齢はマイナス2歳ぐらいだけだな!

だからか、だからなのか……。

「ルリが脱走なんてするから忘れてた。注文していたものが届いてたんだった。」

なんか物凄くイヤな予感がして後ずさろうとしたらなにかにぶつかった。

あれ、後ろこんなすぐ近くに壁あるっけと思って見上げれば爽やかな笑顔を浮かべている人と視線がばっちり合った。

「俺たちからのプレゼントだ。」

そう言って優雅な仕草であたしの髪を一房手に取ると口付けた。

普通にしていればカッコいいのに如何せん口を開けば危険な発言しかない。

ぱちんつと留める音がして首になにかが付けられた。

「うん。似合ってるよ、ルリ。」

「これでルリがどこに居ても分かるな。」

につこりと穏やかな笑顔を浮かべるリオルの手には手鏡。

「これ首輪ああっ！！」

そう、自分の首には愛らしい装飾が施された首輪がつけられていた。顔を覆うとその場にしゃがみ込んだ。

「ルリちゃん。」

リリーナ様に声をかけられて恐る恐る顔をあげるとほわほわとした笑顔を浮かべていた。

「ふたりのこと、よろしくね。旦那様も私も孫の顔が見られるのをとても楽しみにしているから。」

もう死刑宣告にしか聞こえないんですけど。

「期待されてるし頑張らないと。」

「ああ。」

何をもって聞いたらもっと危ないことになりそうだからぐっと飲み込んだ。

熱を含んだ視線を感じてがたがたと震える。

ぽんっとなふたりの手が肩に置かれた。

「大丈夫だ。ちゃんと優しくする。」

「幸せにするから良い家族になろうね。」

逃げ道など最初に目を付けられた時点で閉ざされたも同じだったのだ。

(後書き)

ツツコミが足りませんとしか (r y

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4436u/>

聞き分けのない子猫

2011年10月8日23時55分発行